

とうきょう すくわくプログラム実践報告書

所在	東京都小平市花小金井 6-16-3
園名	アスク花小金井保育園

1. 活動のテーマ

<テーマ>

～えいごで動物のなきごえは？

(同じものを聞いても人や国によって違う表現をすることを学ぶ)

<テーマの設定理由>

動物に対して興味関心を抱く子どもが多く、動物について探究活動を深めたいと考えた際に鳴き声に着目をした。園の強みとして英語のレッスンを通常よりおこなっているため、日本語の鳴き声に留まらず発展して言語の探究にもつなげることができると考えたため。

2. 活動スケジュール

11月から3月まで行い、月に1回ネイティブの講師を招致し他国の文化に直接触れる機会を創出することで深く探究活動ができるようにする。

12月～1月 えいごで動物の鳴き声

2月～3月 動物を描く、えいごで動物の鳴き声

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

- ・動物の絵カード
- ・スピーカー
- ・鳴き声の音源
- ・図鑑（動物・鳥・両生類・爬虫類・昆虫）
- ・くまさんくまさんなにみてるの
- ・できるかな？あたまからつまさきまで
- ・塗り絵
- ・どうぶつくらべっこ
- ・リングカード・おやこ

4. 探究活動の実践

【3 歳児実施分】

問いを考える： 動物に興味を持てるように、動物カードやイラストを見せながら「この動物の鳴き声は何か」「動物の名前言えるかな」など問いかける。

探究活動の様子： 保育中とえいごレッスンで、共に鳴き声は理解していた。動物の名前は、覚えることに時間がかかっているように見受けられた。講師に聞かれて答えることに恥ずかしさを感じている姿も見られた。その場合は、保育者が子どものそばにつき、一緒に伝えるように援助をすることで発言(発音)をすることができた。

ふりかえり（保育士の気づき）： 初めの頃は、興味を持っていた。途中から、内容が変わらないからか、飽きている様子が見られた。課題になっていた動物のイラストを描くことで、再び興味を持つようになった。講師のとなりで発表をする際、恥ずかしがりながらも英語で発表することができた。（子どもの様子に合わせて、保育者が隣に並ぶ。保育者が先に発音をして、後から子どもが発音できるよう促した。）

環境設定では、子どもたちの目に入る場所に動物のイラストを貼ることで、子ども同士で自然と発音をする姿が見られた。えいご講師とコミュニケーションを取り子どもたちも講師に興味を湧き、すくわくの探究活動の意欲に繋がったと感じた。

【4 歳児実施分】

問いを考える：

「この動物の名前は？鳴き声は？」とイラストカードを見ながら考えた。

探究活動の様子：

えいご講師の問いかけに対して、初めは英語での動物の名前がわからず日本語で動物の名前を言う子が多かったが、その後のすくわくの活動が続けることによって、段々と動物の名前が英語で言うことができるようになり、鳴き声も同時に理解が進んでいる様子が見られた。最後の方は、子ども達が友だちに向けて好きな動物の名前と鳴き声を発表することが出来るようになっていた。

ふりかえり（保育士の気づき）：

テーマが子ども達の身近な動物に関するもので、分かりやすい内容ではあったが内容が繰り返している部分も多かったように思う。クラス全体の理解度が同じではなく、差が大きい状態があり、理解の早い子は活動の進みが早いですが、理解がゆっくりの子は中々進むことができない場面もあり、進め方の難しさを感じた。

すくわくの探究活動がスタートした当初は、英語での動物の名前や鳴き声がわからない子が多かったが、キャストでの活動を行った後、子ども達は興味を持ち、自身で動物のイラストを見て発音をする様子や、友だち同士でのやりとりに関わっている様子もあった。活動後半になると自信をもって友だちの前で動物の名前や鳴き声を発表することができるようになり、成長を感じることができた。

【5 歳児実施分】

問いを考える：「動物の鳴き声とはどんな物があるのかな？」

探究活動の様子：初めは鳴き声や動物はよく知っていても英語が出てこず、思わず日本語で話す子もいたが、すくわくプログラムで絵カードと鳴き声の音源を使用し、繰り返していく中で鳴き声を覚えて楽しみながら英語で動物の名前を話したり、動物の鳴き声を言ったりすることが出来るようになった。たくさんの動物がいる中で動物によっては鳴き声を聞いたことがなく、「どんな鳴き声をするんだろう？」と疑問に思う姿も見られた。また、鳴き声当てクイズをする中で、実際の鳴き声を聞いて楽しみながら、動物の鳴き声に興味をもち、鳴き声を真似して友達同士楽しむ姿が見られる中で、さらに英語にも親しみを抱いている様子が伺えた。発表する際も、気づいた意見を言えるようになったり、絵を描いたことで、友達同士でもクイズを出したり発表もしやすく、良い学びとなった。

ふりかえり（保育士の気づき）：動物の鳴き声は、取り組みやすかった。動物には、親しみもあり、普段から身近なこともあり、鳴き声にもすぐに興味を持って参加していた。英語にも慣れたころに、日本語での鳴き声の表現と、英語での鳴き声の表現の違いに気づけるように伝えと、中には興味を持つ子もいた。5 歳児ということもあり、一緒に疑問に思ったことや、動物の図鑑で動物について疑問に思ったことも調べるなど、すくわくプログラムで取り組むことでよりやりたいと思う気持ちも湧くこともあったと感じた。つい出ていた日本語が英語になった事には、成長を感じることができた。

動物は身近なこともあり、取り組みやすかったが、同じ内容になりやすく深めて取り組んでいくことは難しいと感じた。

(3歳)



(4 歳)



(5歳)



とうきょう すくわくプログラム実践報告書

所在	東京都杉並区
園名	アスクおぎくぼ保育園

1. 活動のテーマ

<テーマ>

～音の鳴る仕組みについて～

<テーマの設定理由>

日常生活の中でたくさんの“音”があることに気付いていく中で表現方法の幅を広げていく。また、廃材を使って遊ぶことや、自分たちで考えながら何かをするということが好きな子供たちが多いため、身近なものを使っての楽器作りを行っていきたい。

2. 活動スケジュール

11月から3月まで行い、月に1回音楽の講師を招致し楽器の演奏や歌声など本物に触れる機会を創出した。また、その時点での子どもたちの興味関心をもとに、保育士と音楽講師と共に問いかけや内容を考え、子どもたちの反応や言葉によって次回の内容を柔軟に変えていけるようにする

11月:オノマトペってなんだろう？

12月:いろんな音を聴いてみよう

1月:実際に楽器を演奏してみよう

2月:いろんな音の分類分けをしよう

3月:自分たちで作った楽器を鳴らそう

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

(活動のためにどのような環境を設定したか、準備した素材や道具)

「おとがいっぱい」という絵本や「オトマネ」というボードゲームを用意し

ひとつのものからどんな音がしそうか想像していった。

オノマトペビンゴを散歩で持ち歩き、“音”について意識や関心を持てるようにした。

ミュージックパッドや廃材(缶やプラスチック容器)と中に入れるもの(ビーズなど)を用意し

どんな音がするか、音の変化を試していけるようにしていった。

4. 探究活動の実践

【3 歳児実施分】

問いを考える：これからどんな音がする？という問いに対して周りの子と同じことを言うだけでなく違う言葉（音）を考えて発言する姿がみられた。楽器の仲間合わせでは「叩く楽器だ」「びよーんってしてる（弦のこと）」など子どもたちなりに楽器の共通点を見つけていっていた。

探究活動の様子：「オノマトペ」ということを知ってから音に関して興味を持つようになり、いまの音は「〇〇だったね」などと話す姿やそれに対して「〇〇って音もするよ」などと会話が広がる様子が見られた。「おとがいっぱい」の絵本を読んだときには自然と本とは違う音も発していったり「オトマネ」のボードゲームでは日常ではあまり見ないようなイラストからもさまざまな音を考えたり思いついたりイメージしてみたりする姿も見られた。楽器作りでは容器に（ビーズなどのもの）をいれていきながら物の違い、量、振り方（鳴らし方）を自分たちで変えていきながら試していく様子があった。また保育者に「大きい音」「小さい音」で鳴らしてみようと声をかけられるとその音が出るようにもしていった。手作りした楽器でも鳴らし方、使い方をいろいろな方法で試しながら「これはどう？」「こんな音したよ！」など考えたり気づいたりする姿も見られた。

ふりかえり（保育士の気づき）：ひとつのものから出てくる言葉が多い子どもたちだと感じた。すぐに思いつきなような言葉以外によく思いついたなあというような言葉がどんなものからでも出てきてきた。なじみのないものでは言葉が少なくなるようだったのでこれからいろいろなものに触れていく中で言葉が増えていくと思う。楽器作りではある程度、保育者が環境を用意して行っていた。「この容器になにを入れたら音がする？」との問いに対してこちらが予想していたもの以外のものも子どもから出てきたことがあり、柔軟な発想に驚かされることがあった。また、なかには音が鳴らなそうなものがあったがなるべく子どもの意見を取り入れながら試せる環境を作っていくようにした。手作り楽器で遊ぶ際には、自由に遊んでいるともものの使い方が雑になったり音が大きくなったりしてしまうことがあったので、音楽をかけてそれに合わせて鳴らしてみることや壊れて使えなくなってしまうことに気づいていけるような保育者の関わりや工夫もしていくことが大切になっていったと思う。

【4 歳児実施分】

問いを考える：身普段子どもたちが使っている身近なものからどんな音が想像できるか考えてみた。音楽が好きなクラスなため、風の音は？雨の音は？など言葉が止まらないほどたくさんの言葉が上がっていた。毎回同じものではなく、違うものについて考えていき子どもたちの引き出しが沢山増えたと感じている。その後、様々なもの・音の鳴る楽器に触れて〇〇楽器か考えていった。腱板だからなど子どもたちも段々理解が深まってきていた。最後には自分でものづくりをし音を奏でていた。

探究活動の様子：オノマトペとは何かを知り、身近な物に当てはめて声に出していった。普段言葉にすることは少なかったがすくわく音楽を通して物がどんなふうに鳴るのかを想像してみたり、みんなの前で発言することで周りの子の引き出しも増えていったと感じる。オノマトペシートを子どもの目のつくところにおくところらが言わなくても「これオノマトペだ！〇〇だ！」と発言する子が多かった。日常の中でも触れていくことで子どもたちにとっても楽しい内容となり、散歩中にも「これオノマトペだ！」「音がするかも」と反応する子が増えた。すくわくの時間でない時も工作作りが好きな子どもたちは想像を膨らませて作っていた。輪ゴムをつけたら・テープでまいてみたら・この入れ物の中にいれてみたら等やりたいことを各々がしながら完成させ先生に褒めてもらって嬉しそうにしていた。

ふりかえり（保育士の気づき）：オノマトペに触れるにつれ、子どもたち同士でも「これは〇〇だね！」と室内でも戸外でも子どもたち同士で会話を膨らませていた。回数を重ねるにつれて自分の考えだけでなく他の人の意見も取り入れより多くのオノマトペを知っていったように感じる。また音楽が好きな子どもたちであったため色んな楽器への興味やどんな音が鳴るかをイメージすることが身近になっていた。音を聴きながら動く内容もありただ考えるだけではなく動きながら考えて発言するということで身体を使うことでよりこどもの中に入りやすかったように感じた。この機会を活かし、様々な物に触れる機会を今後もっと増やしていきたいと感じた。

【5 歳児実施分】

問いを考える： オノマトペについて初めに触れ、身の回りにあるオノマトペを集め共有する。その後身の周りにある物を使って実際に簡単な楽器を作り、どのように音になるのか、音のなっているときの物の様子は何かを知り、楽器はどんな種類があるのか触れる。

探究活動の様子： オノマトペという言葉を知らない子どもが多くいたが、実際にどういうものかを知せると見の周りの生活の中にたくさんあることに子ども自身が気づく。「お部屋の中では〇〇があるよね」「お外に出たら〇〇じゃない？」と子ども同士で気づきを共有する姿も見られた。身の周りにある紙コップに切り込みを入れ、輪ゴムをひっかけ、輪ゴムをはじくことでできた弦楽器では、ただ音が鳴るだけではなく、弦がどのように揺れているか、どんな音がするのかを顔を近づけ観察する姿も見られる。その後、楽器は色々な種類に分類されることを知り、正式名称まで覚え、楽器を分類することも出来るようになり、興味が深い様子だった。

ふりかえり（保育士の気づき）： 子どもたちの「なんだろう？」がたくさん見られる機会になり、自分たちで気づいたものをお友だちに共有することで、更にそこから「これもオノマトペだよね？」等気づきが広がる姿が見られていた。「オノマトペ」を覚え、散歩の道中や生活のなかでも「これってオノマトペって言うよね？」等と生活の中に自然と出てくるようになった。身の回りのものを使って楽器を作る際にも、ただ音が鳴ると関心するだけでなく、どこから鳴るのか、弦がふるえていることに気づく等、様々な発見が子どもたち自身でできていると感じた。子どもたち同士で身近にあるものを使って、様々な音を作り出し、楽しむ姿も見られたため、オリジナル楽器での演奏会を行うなどの機会を作っていきたいと感じた。



とうきょう すくわくプログラム実践報告書

所在	東京都杉並区
園名	アスクおぎくぼ保育園

1. 活動のテーマ

<テーマ>

～ボールについて学ぼう！！～

<テーマの設定理由>

普段からよく遊んでいるボール遊びの幅を広げていきたいため。また、ボールについて「どうして?」「なるほど」などの新たな気づきに触れ、探求活動を深めていきたい。

2. 活動スケジュール

11月から3月まで行い、月に1回体操の講師を招致し身体の動かし方についてこどもたちの前で実演をしたり、探究心を書き立てるような助言をもらった。また、その時点での子どもたちの興味関心をもとに、保育士と体操講師と共に問いかけや内容を考え、子どもたちの反応や言葉によって次回の内容を柔軟に変えていけるようにする

11月：ボールってなんだろう

12月：自分たちでボールを作ってみよう

1月：ボールを弱く投げる遊び・強く投げるゲームを考えよう

2月：いろいろなボールを使ったり投げ方を工夫したりしてみよう

3月：ボールを使う遊びになにが必要か考えよう

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

(活動のためにどのような環境を設定したか、準備した素材や道具)

ボールを作るための廃材やテープ類の準備をした。

ボールの力加減が必要な遊びとしてポッチャで遊んだ。

サッカーをするためにゴールを準備した。

野球（ボールを打つ遊び）のためにプールスティックやラケットの代わりとして段ボールを用意した。

ボールの違いを知るために、大小様々なボールを使っていった。

4. 探究活動の実践

【3歳児実施分】

問いを考える： ボールってなんだろう？という問いに対して擬音で答える子もいれば形や色を答える子、遊びを答える子などさまざまだった。

探究活動の様子： いろいろなボールを知るところでは空気のないボールを触ったり転がしたり落としてみたりしたあとに空気を入れたボールで同じことを試したことによりその変化や違いに「硬くなったね」「とんだ（弾んだこと）」など話す様子があった。またそこでボールには空気が入っていることを知った子もいたようだった。ゲームや遊びにボールを取り入れていくとボールの動きをよく見たり強く・優しくと力の入れ方を変えたりしていく様子もあった。また保育者のやっているところを見てまねしたり気づいたりすることもあり、試してみる姿もあった。日々の保育の中でも「できるかも？」と子どもたち同士でボールを使った遊びを考え、試したりしながら、幅を広げていく様子があった。

ふりかえり（保育士の気づき）： ボールってなんだろう？に対しては想像できることが多かったが、どんな遊びができるか？というところでは新しく考え付くということは難しかったように思う。ボールを知るところではボール作りや空気を入れたことは子どもの気づきが多い活動になったように感じた。遊びは保育者が提供していったが、その中では大きいボールと小さいボールのどっちを使ったほうがいいのかや力を強く弱くするかなど問いをわかりやすくすると子どもたちから考えてみたり思ったこと話したりしながら活動を進めていくことができた。ルールを工夫することでボール遊びの中での「コントロールをする」「力加減」などねらいを持った活動にしていくことができた。3歳児には「サッカー」「野球」「バスケ」といったようなものを行うには難しいが、それらをできるようになるための動きや運動というのはいまからでも取り入れてくことができると感じた。

【4 歳児実施分】

問いを考える： ボールであそぶものは何だろうと質問するとはじめはドッチボールしかでてこなかった。ボール遊びが好きだがボールについて改めて触れて考える機会は無かったためすくわくを通して他には何があるのか考えようとするが増えた。ちいさなボールや大きなボール、ボールの数が変わるだけでさまざまな考えが出てくるようになった。

探究活動の様子： ボールとは子どもたちにとってドッチボールをすることは頭にあったが、他のものはあまり意見が出てこなかった。講師が少しヒントを出したりいろんな遊びを教える中で徐々に子どもたちからもいろんな意見が出てくるようになった。ボールのやさしい投げ方・強い投げ方はどうしたらそうなるのかを考えてみたり、また次に繋げて実際にやってみるなどの経験を通して子どもたちの投げ方も変わったように感じた。（ドッチボールが好きで強く投げることに意識が向いていたクラスだったため）徐々に「ふわあん」と言いながら投げるなどの声も上がり考えたことを素直に遊びの中で取り入れていた。

ふりかえり（保育士の気づき）： 身体を動かすことが好きなクラスだったためはじめは楽しくなりすぎる場所もあったがボールの使い方（強く・優しく）などを考え、それをやってみるということを楽しみながら行っていた。的を用意したりゴールを決めて行うことでただ楽しく投げるではなく、ボールにも変化がついて面白いと味わっていた。日常の中でも「これはすくわくでやったよね！」「的当てやりたい！」と言う子どもも多くただおもいきり投げるではなく色んな投げかたがあるから面白い、また子どもたちにとっても新しい発見を感じることができていた。自分一人では知らなかった考えを知る機会ができ考えてやってみようと挑戦する気持ちが芽生え良いなと感じた。

【5 歳児実施分】

問いを考える：ボールがなにか改めて考え、ボールはどんな形か、どんな時に使われるかを考える。そのうえで小さなボールを地面に落とすとどうなるか、投げるとどうなるか、大きなボールを蹴るとどうなるか気づきを共有する。その後、小さいボール、大きいボールを使ってできる遊びをグループで考え発表し、実践する。

活動の様子：ボールって丸い形だね、ゲーム遊びをする時に使う、大きいボールは〇〇の時につかう、小さいボールは、と子どもたちが気づいた事を次々に共有する姿が見られた。小さいボールはキャッチしづらいけど、大きいボールはやりやすい等色々な角度から気づく姿が見られた。グループワークでは、「これは小さいボールだとやりにくいよね?」「これだと難しいかなあ」と自分たちの意見を言い合い、1つずつのゲームを考える事ができた。実践の日になり、小さいボールでは中あて、爆弾ゲーム。大きいボールではサッカーを行う。どちらのボールも使い、なんで小さいボールは蹴りにくいんだろう等自分で考え、発表し共有する姿が見られた。

ふりかえり（保育士の気づき）：体操のすくわくではより身近で分かりやすかったのか、子どもたちからの気づきが多く出たように感じた。普段行っているゲーム遊びから連想させ、どんな時にどんなボールを使って遊べるか自分たちで意見を出し、実際に行ってみてどう思うかなど共有することができており、更に日常での遊びが自分たちで考え展開できるようになったと感じた。また、自分のクラスだけでなく、「ちいさいこたちだったらこんなことができるかも」等の発言も見られたため、異年齢の関わりの中で一緒に遊べる機会などを持ち、さらに探求活動を深めていきたいと感じた。

